

## 脂肪注入による豊胸術

酒井 直彦<sup>1</sup> 矢沢 慶史<sup>1</sup>

Naohiko Sakai<sup>1</sup> Yoshifumi Yazawa<sup>1</sup>

銀座 S 美容・形成外科クリニック<sup>1</sup>

脂肪注入による豊胸術は、より自然な乳房に近い結果を得られることから肯定する意見と、様々な合併症をきたす可能性があることから批判的な意見との双方が存在する。

近年では Coleman 法に準じた手技的な改良による生着率の増加や合併症率の低下が報告されている。また、脂肪幹細胞に関する基礎的研究が進み、積極的に臨床応用もなされている。これら手技的な改良や、移植細胞への工夫から、治療法として確立されつつあると言える。

対象は、豊胸術を施行した症例、他院での豊胸術後に感染を合併して変形した乳房の修正例である。術後 6 ヶ月以上の経過観察を行っていた症例とした。

方法は Coleman 法に準じつつ、より簡便化させた multiple injectin 法により脂肪移植した。脂肪注入量は豊胸術で片胸 120～575cc（1 回注入量の最大は片胸 360cc）であった。

経過観察は理学所見および検査所見（CT and/or 超音波検査）で行った。理学所見で明らかな腫瘤を自覚した症例はなかった。

脂肪注入による豊胸術の利点は、1) 自家組織である（異物を使用しない）、2) 痩身治療が同時にできる、3) 感触や体勢への追従が自然である、4) 傷が少ない、5) 部位や量の調節性が高い、6) X線検査に写らない、などである。裸の交流を持つ温泉文化を有し、習慣的には他者に整容治療について知られたくないという感情を有することが多い日本人においては、インプラントを用いた豊胸術よりもメリットは大きいといえる。

脂肪注入による豊胸術において、術前のインフォームド・コンセント、手技、画像検査を含んだ経過観察が重要である。手技的な安定が得られれば脂肪注入は、豊胸術および乳房形成術の一方法として有効性の高い方法であると考えられる。